S. マルケリウス

E. Markelius

中　真　己

20世紀の建築家　7

建築家が都市計画や都市デザインに異常な関心を寄せ，機会があれば自らもそれらの仕事に参加しようという強い熱意をもっているのは，最近の世界的傾向である。今日，いかにすぐれたデザインであっても，個々の建築が人間の生活環境に与える影響は非常に限定されたものにすぎなく，都市空間の全体像の中での構成単位としての建築デザインへアプローチするのでなければ，建築空間の存在価値が薄れるのではないかという懸念が多くの建築家の心を支配し始めている。建築家の都市への関心だけについていえば，とくに最近の現象ではない。周知のように20世紀初頭の数十年に現われた建築家の描いた様々な都市像は，そのヴィジョンと予見の意義が今日でもなお評価されている。ル・コルビュジエのようにその当時からなお今日まで自己の都市像を主張し続けている建築家さえもいる。今日の都市問題の発生の萌芽は，20世紀の初めからすでに少数の人々によって洞察されていたことは否定できないが，しかし，今日のように，一般の関心事となったのは第二次大戦後である。

現代の建築家が大きな関心を寄せ，あるいはそれぞれに様々な形で新しい提案さえもしている今日の都市の状況は，ひとつの建築をデザインする場合のような仕方では解決できない多くの複雑な問題を含んでいる。建築家自身，いかにすぐれたアイデアであると自負しても，現実の諸問題は，そのような矜持をまったく受け入れないほどきびしい面をもっている。とくに欧米で培われて形成された長い伝統をもっている建築家像と，都市計画または都市デザインを行うビューロクラシーの体制との間には越えがたい大きな溝がよこたわっているのである。1920年代に新しい都市デザインを実行することのできた，エルンスト・マイは，当時，いわゆる自由な建築家ではなく，フランクフルト・アム・マインの市当局の建築課長であった。自由な建築家とビューロクラシーの立場とは必ずしも相対立し矛盾するものではないが，都市計画や都市デザインにおいては，慣習的に職業的建築家が参加できなくなっている。ブラジリアのルチオ・コスタやオスカー・ニーマイヤー，チャンディガールのル・コルビュジエその他の場合は建築ジャーナリズムで大きく注目されているが，後進国に特有の現象であって，むしろ例外的といわれている。しかし，公共的な建築計画が競技設計でアイディアを募集する国々では住宅団地計画や都市計画をも競技設計で案を広く求める場合も少なくない。ヨーロッパの国々でも，そのような実例がいくつもある。たとえば，フィンランドのクセナラなどはそのもっとも注目すべきひとつといえよう。

ビューロクラシーによる都市計画や都市デザインが好ましいか，自由な建築家によるものが望ましいか，そのいずれかを決定することは容易な問題ではない。イギリスにおけるL. C. C. の活動は，いわゆるデザイン好みの建築家にとってはあまり興味や関心の対象にならないかもしれないが，都市計画の専門家の間では非常に高く評価されている。これに対してイタリアにおけるINA の住宅建設においては，多くの建築家が参加して多彩なデザインで建築雑誌を賑わせはしたが，ハウジングの問題としてはL. C. C. の場合ほど認められてはいない。このような例から推察しても，建築家が実際の都市計画や都市デザインに参加して自らのヴィジョンをデザインに移すことが，いかに困難な問題であるか判るであろう。

このような今日の状況の中で，建築家が現実の都市計画や都市デザインを担当して，着実に成果をあげているのは，スウェーデンやフィンランドなどである。とくにスウェーデンにおけるストックフォルムやギョーテボリーの都市計画や再開発は世界中のプランナーから支持され，それらを担当しているのがデザイナーとしても国際的に著名な建築家であるという点で，多くの建築家から注目されている。

今日，イギリスやフィンランドのニュータウンと並んでよく引き合いに出されるのは，ストックフォルムのヴァリンビィとフィルスタである。また，都市部の再開発計画としてもっとも大胆なことが行われているのもストックフォルムのノルマルム地区である。これらの計画で中心的役割を果しているのが，マルケリウスであることは広く知られている。マルケリウスはむしろ現代のスウェーデンの建築家を代表するひとりとしての方が有名であるかもしれない。しかし最近は，彼がデザインした建築はほとんどなく，もっぱら，都市計画や都市デザインの仕事に精力をかたむけているようである。しかも，マルケリウスは，ストックフォルム市当局の都市計画部門の指導者として完全にビューロクラシーの体制の中に参加した形で計画案を作成し実施に移していることは注目に値する。

都市計画家が都市デザインにおいて，単なるプランニングだけに終ることなく，マスター・プランの次の段階の建築物のマスター・フォルムあるいはマスター・スペースといったフィジカル・デザインまで行うことが，いかに興味ある問題であるかということは，マルケリウスがディレクターとして作成したストックフォルムの都心のノルマルム地区の再開発案によって理解できる。この歩行者を主とした業務とショッピングのための新しい再開発計画は，五つのスカイスクレーパーを中心としてそれらを結ぶ低層部の建築から形成されているが，五つのスカイスクレーパーはそれぞれに建築デザインが異なるのである。マルケリウス自身がデザインを担当したのは真中のもので，一番南側の棟はバックストロムとレイニウスのチームのデザインである。しかし，異るのは使用材料やサッシ割や，それに伴う細部のデザインだけであって，全体のデザインはいずれもほとんど同じなのである。マスター・スペースや，マスター・フォルムが都市デザインにおいていかに重要な問題であるかという例として注目すべきケース

のひとつである

このような問題を実際に提起しているマルケリウスは，彼自身，プランナーとしてもすぐれているのではあろうが，建築家が都市計画や都市デザインに参加することの困難さを見事に打破してすぐれた成果をあげている貴重なひとりである。

北欧の建築家は，比較的に多才であり，とくにフィンランドやデンマークでアアルトやヤコブセンのように家具などにおいてもすぐれたデザインをしているひともいる。しかし都市計画や都市デザインとなると，最近はアアルトの計画案も発表されているが未知数であり，スウェーデンの建築家にはかえって家具デザインなどにすぐれた腕を見せるものがいないことは興味深い　むしろ，マルケリウスのように都市計画を志向する建築家が多いことは，ひとつの興味ある問題であろう。

2

マルケリウス Sven Markelius は1889年にストックフォルムで生まれた。つまりスウェーデンの近代建築のパイオニアのひとりであるアスプルンドの4年後である。年令的にはほぼ同じ世代ということができるであろう。マルケリウスは，アスプルンド同様にストックフォルム工科大学を経て美術アカデミーに学んでいる。マルケリウスが工科大学を卒業したのは1913年で，美術アカデミーを出たのは1915年であった。アスプルンドが学業を終えると直ちに1909年から仕事を始めて次々と実際のデザインを手がけたのに比べて，マルケリウスはややおくてであった。

しかし，それ故にアスプルンドとほとんど同世代でありながら，マルケリウスはスタイリッシュなデザインに手を染めることがなかったという点で，アスプルンドに比べてはるかに近代建築家らしい印象を与えている。クラーソン，エストヴェリー，テンボムといった大物の建築家に続いてブリリアントな才能を早くから咲かせたアスプルンドに比べて，修業時代が長かったことによって，マルケリウスがドイツやフランスを中心として始った新しいデザインの影響の下で建築家として大だちすることができ，それ故に今日の地位を獲得することができたのかもしれない。

現在までに知られているマルケリウスの最初の作品は1928年の自分の住宅ということになっている。他にそれ以前に作品があるのかもしれないが発表されたものでもっとも早いのはこの住宅である。そして，これはスウェーデンにおける近代建築のもっとも初期の作品のひとつとしてしばしば言及されているこの住宅はインターナショナルスタイルのものであり，1930年のアスプルンドのストックフォルム博覧会の前にデザインされたという点で，マルケリウスが独自に中欧の新しいデザインの傾向を摂取したことが明らかである。

これに続く作品は1929年のストックフォルム空港の格納庫や，HSB の集合住宅や，30年のストックフォルム工科大学の学生会館などがある。当時，彼は工科大学の教授をしており，キッダー・スミスは〈his Student's Club〉と書いている。この作品はウーノ・オーレン Uno Åhrén との協同設計によるものである。

1930年にはストックフォルム博覧会が開催された。この全体計画を担当したのはアスプルンドであり，そのデザインのインターナショナルスタイルへのアプローチは，北欧諸国の建築デザインに決定的な影響を与えた。かかる意味でもっとも重要な博覧会であったが，その主題のひとつが住宅デザインであったという点でスウェーデンの住宅問題においても歴史的意義をもっている。マルケリウスもこの博覧会のために，シュマレンゼー（Kurtvon Schmalensee）と協同で住宅を設計した。この住宅はいわゆる自由なプランに基いて，ローエやル・コルビュジエの当時の住宅と類似した空間構成を採用している。リビング・ルームの一部にスタディオ・ハウス的なバルコニーが空中に架けられている点などは大きな特徴であると同時に，新しい住宅デザインの先駆的なものであった。

しかし，これらの新しいデザインのアプローチは一部の人々の注目するところであっても，マルケリウスの建築家としての実力を世に問うようなものではなかった。マルケリウスの名が広く知られるようになったのは，1932年のヘルシンボーリの音楽堂によってである。

この音楽堂は，当時の最新の音響学上の成果に基いた最初のものという点でも注目された。フランスの音響学者ギュスターヴ・リョンの協力の下に設計されたものである。それればかりではなく，その造形的な面やプランニングの上でも画期的なデザインであった。学生会館や博覧会の住宅のインターナショナル・スタイルを越えて，マルケリウス自身の個性的表現を示したもので，彼の代表作であるばかりでなく，スウェーデンにおける20世紀建築デザインの中でも屈指の作品のひとつにあげられている。400席の小ホールと1000席の大ホールとが上下に重なった棟は，柱を屋根まで意匠的にあらわに延長した直線的構成でまとめられ，これに附属するレストランは大きく張り出した曲面的構成を見せ，これらの二つの部分の対照が見事な調和を見せている。非常に素直な空間構成でありながら忘れられない印象を与えてくれる。

1935年の集合住宅もまたマルケリウスの代表作としてしばしばあげられるものである。これはドイツの20年代のジードルングなどに比べてかなり異なったデザインであり，草花で縁取りしたバルコニーの手法などは，その後のスウェーデンの集合住宅のデザインにかなり影響を与えたものである。プランニングにも，独自の考え方が表われていて興味深いものである。

建築士クラブは1937年の作品である。この建築と，1954年の市民会館や55年の労働組合センターなどと比べることは，マルケリウスのデザインにおけるファサードの構成の消長をうかがうことができる。もっとも新しい労働組合センターが全面サッシ・ウォールの手法をとっているのに比べて，建築士クラブは壁部分が見付の大きい格組として開口部のプロポーションを決定している　ハンチング・ウィンドウから，全面サッシ・ウォールへ移行する中間的デザインともいえよう。また，インターナショナルスタイルからの脱皮を意識して新しいデザインを追求し始めた作品と見なすこともできる。

マルケリウスの名が，国際的に広く知られるようになったのは1939年のニューヨーク博のスウェーデン館のデザインによってであった。アアルトのフィンランド館と並んで，北欧の建築デザインの水準の高さに世界の建築家の目を向けさせた点で，スウェーデン館を設計したマルケリウスの功績は非常に大きいものがある。しかも，当時マルケリウスは50才になっていた。この建築は博覧会建築という仮設のもの故に，もはや残されてはいない。写真や図面などの記録を見ると，当時の世界的なデザインの傾向の中で，非常に独創的な空間構成をつくり出したことがわかる。矩形や直角にとらわれない自由なプラン。細いピン柱で軽々と屋根を支えた新しい材料と技術の適用。フィンランド館の閉鎖的な空間に対して，きわめて開放的な空間。マルケリウスは，アスプルンドのストックフォルム博のような外国の新しいデザインの移植ではなく，彼独自のデザインによって，世界の建築デザインの流れのトップに立ったのであった。

第2次大戦後におけるマルケリウスの国際的舞台での活躍は華々しいものとなった。国連の議場と事務局の建築の問題が起るや，直ちに彼は選出されてスウェーデンを代表する建築家となり，コルビュジエやニーマイヤーを含む10人ほどの計画委員会に参加した。最終デザインはウォーレス・ハリソンを中心とする設計チームによって行われたが，委員たちはそのコンサルタントとして重要な任務を担ったのである。もちろん，マルケリウスはその中のひとりで，しかも，彼だけが室内デザインではあるが実際の設計をすることができた。経済社会理事会，信託統治理事会，安全保障理事会の三つの議場の内部デザイン

をスウェーデン，ノルウェー，デンマークの北欧3国でそれぞれ担当することになって，マルケリウスとフィン・ユールとアルネベルクといった代表的建築家がそのために選ばれた。いわば，スカンジナビヤデザインのコンクールのようでもあった。マルケリウスが担当したのは経済社会理事会の議場であった。結果は，彼のデザインがもっとも好評であった。

その後パリに建てられたユネスコの本部の建築についても，彼はルチオ・コスタ，コルビュジエ，ロジェルス，グロピウスとともにデザインのコンサルタントとして名を連ねた。

このようにして，建築デザイナーとして国際的にも名が知られ，高く評価されるようになったマルケリウスが，第2次大戦後に設計した建築はあまり多くない。先に触れた市民会館と労働組合センターの他に，45年の自邸が発表された程度である。しかし，マルケリウスは，さらに大きく転身して，都市デザインに精力を注ぐようになったのである。建築家としては過去の人かも知れないが，都市計画家もしくは都市デザイナーとしては，今日，世界的に見ても比肩するものが見当らないほど多くの成果をあげている。

3

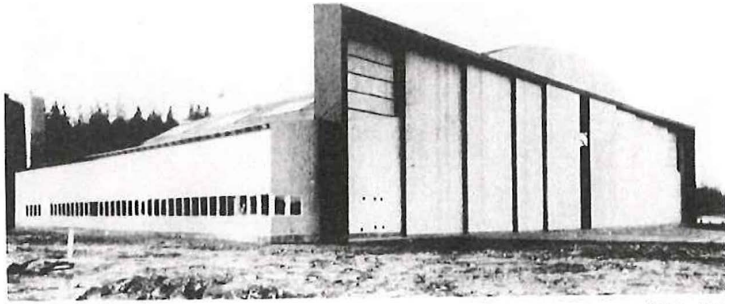
1953年から開始されたヴェリンビィの計画は，それが発表されるやいなや世界中の大きな注目を集めた。マルケリウスがそのスタッフの中心であることで，建築家たちの寄せる関心も大きいものであった。建築家としては著名であっても，その国の首都の都市計画の最高スタッフに選ばれるといったケースは非常に少ない。ブラジリアのルチオ・コスタの場合は例外である。アアルトのヘルシンキ計画も注目されるが，部分的なものである。これらに比べて，ストックフォルムの都市計画は，都市全体の交通難の緩和や再開発やニュータウン計画を含めてかなり大がかりなものである。従来のままでは，当然，ビューロクラシーのスタッフでマスター・プランが作成されるケースであった。それ故に，マルケリウスがディレクターとなったことは，多くの建築家を羨しがらせ，と同時に大きな期待が寄せられたのは当然である。

マルケリウスがすでに報告しているように，ヴェリンビィ地区やファルスタ地区のニュータウン建設も，ノルマルム地区の再開発もすべてストックフォルムの全体の発展のためのマスター・プランの一環として計画されたものである。具体的には，西北部のヴェリンビィから，ノルマルム地区を通って東南部のファルスタまで軌道が敷設された，都市部では地下鉄道となっている。この主要な交通動脈を軸線として，その線状の各点を次第に拡大して行こうというのが，大きな基本方針である。しかし，今日なお進行中であり性急に評価をくだしてしまうことは危険である。しかし，それにもかかわらず，これまでにまとまりかけてきた三つの地区については，以々に論じることはできよう。

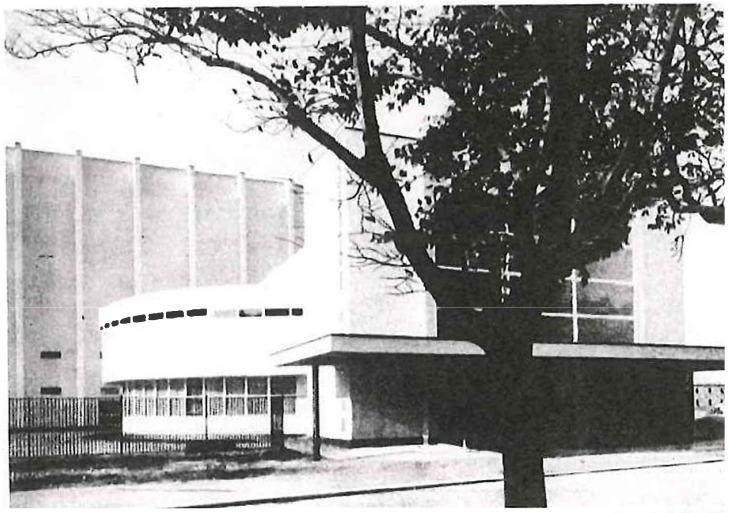
一般に，最近のスウェーデンの建築デザインの水準はフィンランドやデンマークに比べてやや劣っている。したがって，建築家の目から見ると，ヴェリンビィでもファルスタでもノルマルムでも，建築デザインだけについていえば必ずしもすぐれたものと思われないだろう。しかし，だからといって，これらの計画が低い水準のものときめつけることはできない。先にも触れたように，個々の建築のデザインがそれぞれ担当する建築家による個性の展覧会のようになれば，たとえば，西ベルリンのハンザ地区のようになってしまうだろう。

マルケリウスによる都市計画は，多くの建築家を参加させて建築のデザインに当らせている点が興味深い。コスタのブラジリアのように，ニーマイヤーがたった一人ですべての建築デザインをするのとは異っている。マルケリウス自身も一人の建築家として建築デザインを担当しているがこれも非常に興味深いことである。先にも述べたように，マスター・プランがきびしく設定されているので，全体に統一感がある。それでも，たとえば，

Works of
E. Markelius

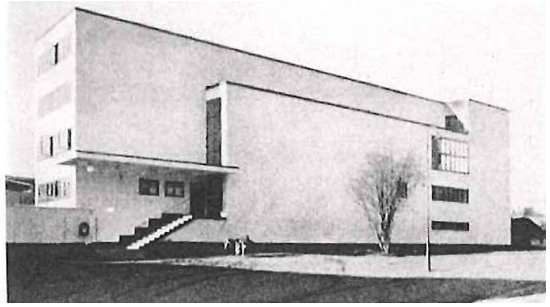


ストックホルムの倉庫 1929

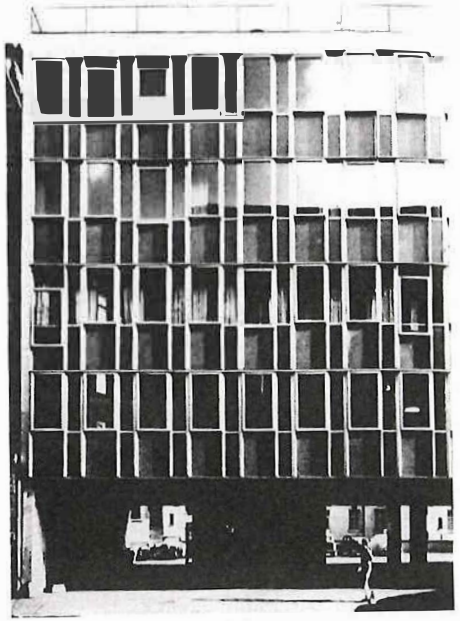


ベルリンホーリ音楽堂 1937

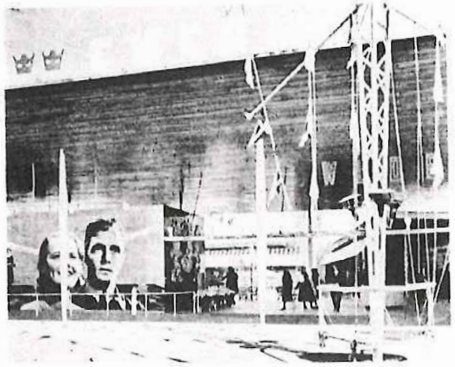
ストックホルム工科大学学生会館 1930 エウーノ・オーレンと協同



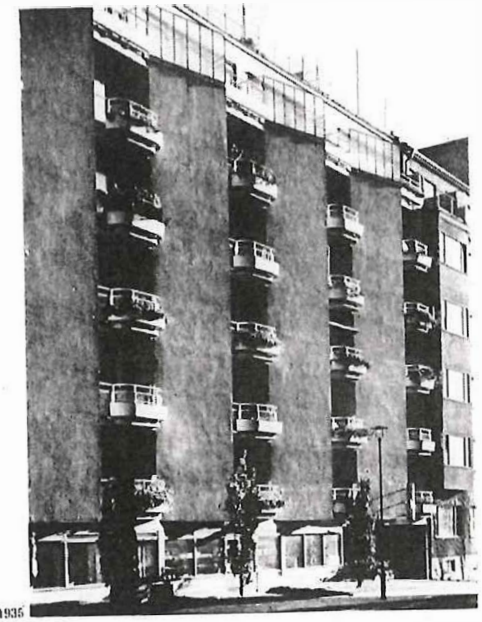
建築工房ア　ストックホルム 1937



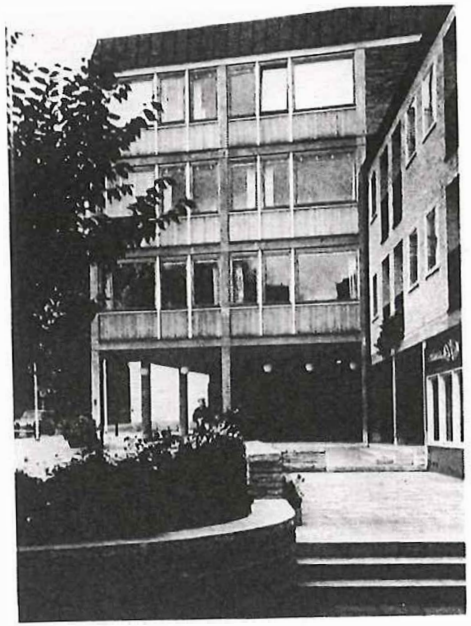
労働組合センター　ストックホルム 1955



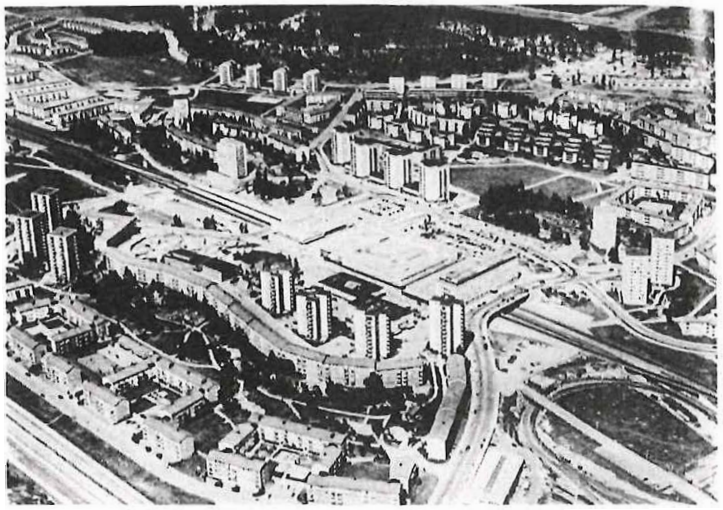
ニューヨーク博スウェーデン館　1939



集合住宅　ストックホルム 1935

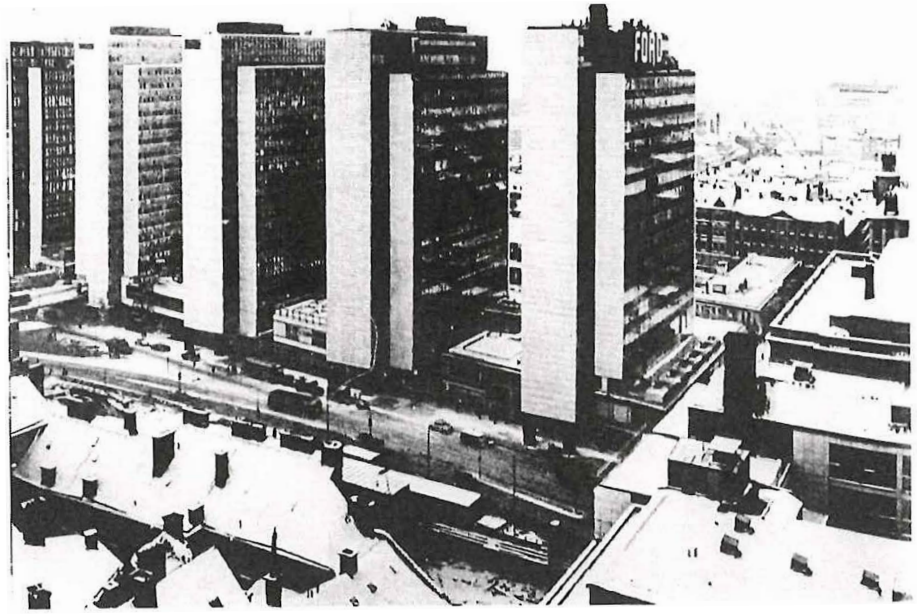


小事務所ビル



31 ストックホルムのシェル・ヴェー（地下鉄ターミナルの上に作られたショッピングセンター）

ストックホルム・ノルマルム再開発地区



ヴェリンビィやファルスタでは教会デザインのみが非常にすぐれたデザインを見せているし，一方でファルスタのショッピングセンターのように，アメリカの最近のデザインのある種の傾向の悪い影響を受けたものもある。

マルケリウスの力量から見て，もう70才を越えたとはいえ，全体の建築デザインを行うことは決して不可能ではないであろう。しかし，マルケリウス自身，決して強烈な個性をもった天才型の建築家ではない。ヘルシンボリーの音楽堂や，ニューヨーク博のスウェーデン館はたしかに非凡なデザインの作品である。これらは，スウェーデンの建築のマイルストーンであるばかりでなく，世界的にみても重要な作品とみなされよう。一部ではこのようなマルケリウスのデザインを非常に高く評価している向きもある。ノルマルムの五つのスカイスクレーパーの並列している景観は，個々の建築デザインよりも，それが，ニューヨークでもシカゴでも見られない都市空間をつくり出しているという点で，新たな高次の空間デザインの問題を提起しているのである。一人一人の建築家の個性的なデザインも重要であるが，都市デザインにおけるアノニマスな性格と衝突することがしばしば起りがちである。ノルマルムの再開発においても，テンボムの列柱のある音楽堂と五つのスカイスクレーパーが激しく対立している。古い都市における宿命かもしれない。これらの問題を今後どう解決してゆくか，いまやマルケリウスは今世紀のもっとも大きな課題と取り組んでいるのである。

参考文献

1) *Sweden Builds* G. E. Kidder Smith 1950
2) *Architects' year Book-3* 1949
3) *Scandinavian Architecture* ThomasPaulsson 1958
4) *Encyclopédie de l'architecture Nouvelle* Alberto Sartoris 1957
5) *Storia dell'architettura moderna* Bruno Zevi 1953
6) *Geschichte der Modernen Architektur* Jürgen Joedicke 1958
7) *Knaurs Lexikon der Modernen Architektur* 1963
8) *A Dicade of Contemporary Architecture* S. Giedion 1954
9) *The New Architecture* A. Roth 1948
10) *Schwedische Baukunst* Torbjörn Olsson-Sven Silow 1955
11) *Ny Svensk Arkitektur* svea-galleriet 1962
12) *Saris Stockholms Guide* 1959
13) *L'architecture d'aujourd'hui-europe* 1955-56 *-cités Nouvelles* 1962
15) *Town Design* Frederick Gibberd 1959
16) 北欧現代建築の展望--スウェーデン 佐々木宏（国際建築 '63. Dec.）
17) スウェーデンの現代建築 森田茂介（国際建築 '51. Sep., Oct., Nov.）
18) 世界の現代建築 スウェーデン 小池，猪野 1953
19) ストックフォルムの新しい商業センター J. M. リチャーズ（水谷他訳編 国際建築 '62 april）
20) *Face of the Metropolis* M. Meyerson 1963